

双葉支部



田中建設 株式会社

元工事第三部長 脇坂 薫

地元の再生に尽くす

目の前で「ガラガラドーン」という轟音とともに「ろうそく岩」が崩れ落ちました。移動中の車内で遭遇したすさまじい揺れと、目の前の信じられない光景に「これはただ事ではない。大変なことになる」と感じていました。

2011年3月11日のあの日、私は楢葉町の木戸川橋橋脚工事の社内検査を終え、浪江町の請戸川橋旧橋撤去工事現場に移動中で、丁度、富岡漁港前にいました。車がバウンドするような激しい揺れの中、地元の観光名所が海の中に崩落していくのをただ呆然と見ていることしかできませんでした。

揺れが収まるのを待ってから、大渋滞の国道6号を避け裏道を通って請戸川橋へと向かいました。途中、双葉町の前田川橋で津波の第一波をやり過ごし、何とか請戸川橋に到着し、そこで巨大な津波に遭遇しました。津波は海岸の松林より高く、周辺の建物を飲み込みながら川を逆流していきました。私は何とか逃げることができましたが、あと3～4分避難するのが遅かったらきっと間に合わなかったと思います。

私は3月31日まで、避難所や川俣町のアパートで避難生活を送っていましたが、常に社長とは連絡を取りあって仕事再開に向けた相談を欠かさず行っていました。4月からいわき市に移って本格的な準備に入り、4月24日に行方不明者の搜索で浪江町に乗り込みました。

始めはバックホウ7台の10人体制でスタートしました。1日でも早く、1人でも多くの行方不明者を探したいと勢い込んで乗り込みましたが、想像をはるかに超える大量のがれきを前に任務の困難さを再確認しました。その後は認識を改め、重機をかき集めてオペレーターだけでも60人を超える大搜索隊になり、搜索が終了する9月までに、大勢の行方不明の方々をご家族のもとに返すことができました。

作業を進める上で、放射線の管理は重要でした。会社でも若い社員は絶対現地に入れないように配慮していました。現場でも線量計を携帯し、累積線量を計測していましたが、当初は線量が高かった。線量計は1 μ Sv上がるとブザーで知らせる仕組みでしたが、当時はいわきから現場に通う途中、富岡町夜の森以北は線量計のブザーが鳴りっぱなしの状態でした。また、避難所から通うオペレーターが仕事を終えて帰宅すると「放射能をもってくるな」と心無い言葉を浴びることもあったようです。

膨大な量のがれき処理や放射線による健康不安・風評被害、変わり果てた姿になった行方不明者を発見した時のストレスなど、過酷な環境の中でも仕事を全うできたのは、私たちがやらなければという使命感だけだと思います。行方不明者も我々作業員も全員地元の人間です。今後も大きく変わってしまった地元再生のために尽くしたいと思います。

